

第4章 心柱としての人権教育

第5節 平和教育を語る

6年生担任が11回あって、ヒロシマ修学旅行の引率も11回。ひとまとまりの平和学習の数も11あります。平和教育は、私の人権教育の中でも中心的な位置を占めています。この節では、初期の実践を2本紹介します。

この節は、

■ “ムッチちゃん”と41人のなかまたち■

■ ヒロシマのこえがきこえますか■

の2つの項から成っています。

“ムッチちゃん”と41人のなかまたち

これは、1983年度の6年生のクラスにおける実践記録です。集団作りのスタイル形成期の実践です。1984年4月の文章で、同年9月10日発行の『らんじょう』No.16所収。

1. はじめに ～ムッチちゃんのこと～

ムッチちゃんは、京都府宇治市の主婦、中尾町子さんが1945年、疎開先の大分市の防空壕で出会った少女である。横浜空襲で家族は行方不明になり、“大分のおばさん”に預けられた。そこで肺結核になり、「おばさんちの赤ちゃんにうつるから」と一人で防空壕の中で暮らしていた。戦争が終わってからも放っておかれたらしく、水の入っていた竹筒を握って餓死していたという。

1977年8月、中尾さんの思い出を綴った投稿手記が毎日新聞に載り、82年1月に再び同新聞「記者の目」で紹介された。その後、福岡市の小学生と祖父が「像を建てて」と1万円を送ったことがきっかけとなり、社会部が同年3月から全国に寄金を呼びかけた。そして、83年8月3日、大分市裏川公園においてムッチちゃん像の除幕式が行われた。

2. 出会い

“ムッチャン”との出会いは、83年の1月か2月だった。ぼくの本の趣味まですっかり知っている出入りの本屋さんが、こんな本出たんだけどと言って絵本『ムッチャン』を持って学校へ来てくれたのが始まりだった。さっそくぼくは学級の子どもたち（5年生）に読んで聞かせてやった。原爆や戦争を扱った本を比較的よく読んでいる子どもたちではあったけれど、自分たちと同年代の子どもが主人公であるこの話は、また新たな感動を与えたようであった。

6年生になり、6月24日、ひとりの子どもが日記帳に新聞の切りぬきを添えて次のように書いてきた。

絵本になっていた“ムッチャン”の像ができることになった。戦争中のあの壕の中のムッチャンへのつぐないと平和な世の中でありつづけるためにつくられたのだろう。私たちはこれからずっと平和な世の中をつくりていきたいと思う。

絵本を紹介してから5か月がたっていた。5か月前のたった1冊の本との出会いを忘れずにいる子がいた。

それを日記帳に書きとめる子がいた。子どもの思いを何とかできないものだろうか。その日、ぼくはこんな赤ペンを入れた。「新聞、しばらくかります。先生も自分にできることを行動にうつしていきたいと思います。」

かくして“ドラマ”は始まったのである。

3. 千羽鶴

折から10月のヒロシマへの修学旅行にむけての取り組みを進めている時期でもあった。修学旅行実行委員会が組織され、7月に行う戦争展の準備にとりかかっていた。学級では「つるの会」をつくり千羽鶴を折り始めていた。

カンパ活動をするにはもう日が迫りすぎていた。お金をかけないでしかも子どもたちに平和の大切さを意識させることのできる活動はないだろうか。そこで考えたのが修学旅行の“ヒロシマ”と“ムッチャン”をつなぐことだった。7月4日、ぼくは、一枚文集の中で千羽鶴を折ることを提案した。子どもたちは賛成してくれた。みんな41人だから、一人25羽。夏休みを間近に控えてはいるが、決して苦になるほどの数ではない。それでも今まで折ったことがないという何人かの子は、同じグループの子に教えられながら慣れない手つきで苦闘してきた。

7月6日

今、私もムッチャンの平和像にささげる千羽づるをおっています。クラスみんなで平和な世の中をつくりあげていこうと言いあって、こんなこ

とをしたことは思い出になると思う。それに、平和な世の中をつくっていけるように育ていけるのだと思う。あのごうの中で死んでいった苦しみと悲しみを二度と起こしてはいけないと思う。ムッチちゃんの像とともにがんばって生きたい。

10日ほどの間に鶴はそろった。だけど、大分まで持っていくことはできない。市長さんに送り届けよう。そして、除幕式の日にはムッチちゃんの像にささげてもらおう。学期末の忙しさもあって、鶴を糸に通し終えて小包にできたのは7月22日になっていた。送り先一大分県大分市 大分市役所内 市長様。

7月21日

つるを糸に通した。8月12日の除幕式の時、ムッチちゃんの像にかかるのだらう。私たちの平和への願いがムッチちゃんにとどくだらう。少し形の悪いつるもあったけれど、クラスのなかまがいっしょうけんめいにおったものだ。市長さん、どうぞお願いしますと願いたいものだ。この千羽づるをおったいみをいつまでもなくしたくはないと思う。

果たして多忙な市長さんが、1学級の子どもたちの願いを聞き届けてくれるだろうか。そんな不安がぼくにもあったし、子どもたちにもあった。しかし、半月後、そんな不安を吹きとばす朗報が北海道から帰ってきたぼくの机の上に待っていた。大分・佐藤市長からは実にていねいなお礼の手紙が届き、8月1日には毎日新聞の社会面に、6日には毎日小学生新聞にそれぞれ千羽鶴のことが大きく紹介されたのである。

8月6日

私たちが、大分の市長さんに手紙を出して千羽づるを送りましたが、そのことが毎日小学生新聞にのっていました。私たちの平和への願いが市長さんにとどき、ムッチちゃんの像にもとどくと思うのです。私たちはムッチちゃんのためにも平和な世の中をつくりあげていかななくてはいけないと思うのです。

8月12日、除幕式の日。子どもたちが折った千羽鶴は、東大分小学校の5年生の児童によってムッチちゃんの首にささげられた。併せて同封した手紙は、同小の佐藤君の朗読で紹介された。1500人余が列席した盛大な式典の中で、実に破格の扱いであった。

2学期をむかえた9月はじめ、市長さんから2度目の便りが届いた。除幕式の様子を伝える新聞の切りぬきが何枚も同封されていた。数日後、東大分小の佐藤君から手紙と除幕式を写した写真が送られてきた。学級はムッチちゃんの話で持ち切りだった。

ムッチャン像十二回に除幕

大分市裏川公園
わんぱく広場で

千羽ヅル届く

毎日新聞社の呼びかけで全国から建立寄金

小から届いた千羽ヅルを手して「像にささげます」と語る佐藤・大分市長

小学生も平和への祈りを込めて



が集まった「ムッチャン平和像」は十二日、大分市裏川公園内わんぱく広場で除幕式が行われます。平和への祈りを込めて

コーラス 式典参加へ 練習に励む

学生から千羽ヅルが大分市長に届き、式典でコーラスをつとめる同市の児童らが練習に励むなど「ムッチャン像建立」は大きな盛り上がりを見せています。佐藤滋美・大分市長のもとに千羽ヅルを届けたのは、小六三組の三十九人。そえられた手紙には「わたしたちは絵本でムッチャンのことを知り、同じ十二才の少女のことだけに、ひとこととは思えませんでした。わたしたちは一羽々に平和への願いを込め、二度と「ムッチャン」をつくることのないように祈りながら、千羽ヅルを折りました」とありました。

同市長は「日本中の子供たちの心の中に平和への祈りが広がっていることを感じたい」と言い、希望どおしに千羽ヅルを届けたことに、お礼、像にささげることになりました。また、大分県臼杵市、臼杵市の児童も千羽ヅルを折っており、除幕式には代表が参加してささげるそうです。

一方、式で「ムッチャン」(作詞作曲、武田喜明・大阪府立天王寺高教諭)と「若入よ」(同)を合唱する大分市東大分小五年生百五十人は、武田教諭を同校に招き、本格的な練習をしました。わんぱく広場が校区内にあることから参加することになったもので、六日の平和授業では全校児童の前で、この歌を披露、除幕の日に備えます。

ムッチャン 京都府手治市に住む主婦、中尾町子さんが昭和二十一年、大分市の防空壕で出会った少女。横暴な軍国で家族は行方不明になり、大分のおばさんにあずけられたが、肺病(は)いけつ)のため一人防空壕の中で暮らしていました。終戦直後、うえ死にしようとして、毎日新聞の「記者の目」でよいかいされ、福岡市の小学生と祖父が寄金を送ったことから毎日新聞大阪本社社会部が像建立を全国に呼びかけました。寄金は八月末まで同部で受け付けています。

10月2日が運動会、7日、8日が修学旅行。練習と準備であわただしく日は過ぎていった。修学旅行を間近に控えたある日、市長秘書の岡さんが突然■■■小学校を訪ねて来られた。大阪への出張のついでとのことであつたが、わざわざの来校に子どもたちは驚きもしたし、感動もした。そして、アルバムにぎっしりはられた除幕式の写真のプレゼントに教室はわきたつた。佐藤市長をはじめ、大分市の人たちのあたたかい思いやりがうれしかった。さっそく市長さんと、佐藤君のいる東大分小5年1組にお礼の手紙を書いた。

ムッチャんの取り組みはヒロシマにつながれていった。子どもたちは1万羽の鶴を平和公園内の碑にささげ、慰霊祭で決意を述べた。石田明さんの被爆体験に耳を傾けた。実際に広島を訪れ、“ヒロシマの心”にふれることにより、子どもたちは平和への思いを一層強めた。

修学旅行のまとめがやっとできあがったころの10月27日、再び毎小新聞がぼくたちのことをトップ記事に載せてくれた。内容は東大分小へ送った手紙のことであつた。「ムッチャん平和像が仲立ちに、学級交流はじまる」というタイトルに、何だろうと記事を読み進めていくと、今度は東大分小の子どもたちが返事を書いているとのこと。ひとり壕の中で死んでいった“ムッチャん”は、シナリオにはなかつたなかまの輪を大きく広げていってくれた。

11月に入って、東大分小5年1組の子どもたちのドサッと重みのある手紙が届いた。

11月は校区の中学校の修学旅行がある月だった。北九州方面ということで、聞いてみると長崎も含まれているという。子どもたちにそのことを話したところ、千羽鶴を折って持って行ってもらおうということで簡単に話はまとまった。修学旅行に行くのはぼくが初めて送り出した卒業生である。その中に、かつては差別や戦争のことをだれよりも真剣に考え、行動していた子がいた。しかし今は学校の枠の中から大きくはみ出し、「問題生徒」とされていた。ぼくは、子どもたちに理由を話し、その子に鶴を托した。鶴以上の願いをこめて。

4. お花基金

12月中旬、市長さんから3度目の手紙が届いた。子どもたちの手紙のお礼と、ムッチャんが映画になるといううれしい知らせが書かれていた。手紙に3枚のコピーが同封されていた。一つは、岡秘書が来校されたときのことを伝える毎日新聞大分版の記事。一つは市役所内で発行されている「週刊庁内ニュース」に載つた子どもたちの手紙を紹介する「奈良の小学生の手紙を平和の詩に」と題する市長さんの談話。そして、もう一つは、ムッチャん平和像に花を生け続けようとお花基金のキャンペーンがはじまつたという毎日新聞大分版の記事。（この記事にもぼくたちの学級のことを紹介されている。）この記事を読んでよしこれだと思つ

た。例によって一枚文集で手紙を紹介したあと、カンパの呼びかけをした。「防空どうで一人死んでいった 12 才のムッチちゃんは、38 年前のわたしたちの姿であったかもしれないし、未来のわたしたちの姿であるかもしれない。いや、ムッチちゃんの悲劇を二度とくり返さないというちかいがムッチちゃん像だったのだ。わたしたちは、ムッチちゃんの悲劇にこだわり続けて生きていきたいと思う。ムッチちゃん像に花を生けるのもそのためだと思う。……“こづかい”を“平和へのねがい”に!!」と呼びかけた。12 月 20 日のことだった。

カンパ期間は 21 日から 24 日まででの 4 日間、教室の前に置かれた募金箱に子どもたちは、心のこもった 10 円、50 円を入れていった。期間中の 22 日ムッチちゃんの映画化が新開発表された。これがぼくたちのカンパ活動を一層勢いづけた。

12 月 22 日

ムッチちゃんのためにいろいろなことがおこなわれている。それだけ平和への願いが強いのだろうな。そう思う。映画になるってこと、とてもうれしかった。少しでも多くの人にそのことを考えてもらえると思ったから。本当にそんなふうになったらいいな。みんながムッチちゃんのことかんがえてくれたらいいな。そう思う。



結局、募金は 4 日間で 6061 円集まった。予想をこえる金額だった。募金箱の前に立つ子どもたちの表情を見ていると、金額以上の価値があった。その時ぼくは、大分へ持って行くしかないなと思った。



「ムッチちゃん像のお花基金
基金寄託者
ムッチちゃんお花
基金寄託者
収入印
「ムッチちゃん像のお花基金
にしてください」——昨年八
月、大分市裏川公園内のワン
パク広場に建立されたムッチ
ちゃん平和像へ千羽ヅルを送り
届けて来た。県市
■小の児童たちが、今度はお
花基金を集め六日、担任の先
生が、この浄財を持って大分
市役所を訪れ、佐藤益美市長

千羽ヅル贈ってきた 小児童
今度は基金集めて

に贈った。
この先生は同小六年三組担
任の さん。同ク
ラスでは、ムッチちゃん平和像
建立のとき、児童三十九人が
折った千羽ヅルを届けた。そ
の後、新聞でムッチちゃん像の
ことが報道されたり、佐藤市
長からムッチちゃんの映画化の
手紙などが届くと、その都
度、教諭がコピーをして
児童に見せてきた。
昨年十一月「ムッチちゃん像
の周りにいける献花の基金が

足りず、カンパが始まった」
との記事を見た 教諭が児
童に話したところ「みんなで
やろう」と自発的な盛り上がり
となった。冬休み直前、教
室にカンパ箱が置かれ、平和
を願う子供たちの浄財六千六
十一円が集まった。 教諭
は「私が持っている」と冬
休みを利用、妻 さん
と▽長女 ちゃんを
連れて大分市を訪れた。
お花基金を受け取った佐藤
市長は「各地でこんなに共鳴
していたら感謝している。
ムッチちゃん像の反響は大き
く、いい教育材料になってい
るようだ」と思わぬ 市の
子供からの寄付に恐縮の表
情。
 教諭はこのあと、ムッ
ちゃん像を見学したが「子供
たちは自分たちと同じ年の少
女が防空ごうの中で一つの命
を失ったという悲劇に共感し
たようです」と話していた。

児童たちのお花基金を佐藤大分市長(左)に贈る 教諭一家

というわけで、冬休み中の1月6日、ぼくは子どもたちのカンパを持って大分市役所に佐藤市長を訪ねた。市長さんはじめ関係者の方々のあたたかい歓迎を受け、ムッチャン像のある裏川公園へも案内して頂いた。初めて対面したムッチャン。なぜかとてもなつかしい人に会ったような気がした。そして、またしても毎日新聞が大分版と奈良版で、子どもたちのカンパ活動とぼくの大分市訪問を取り上げ7日の記事にしてくれた。これがまた子どもたちを感動させた。

映画はこの夏からクランクイン。上映は来年になる。子どもたちは3月に卒業していった。同窓会をかねて一緒に映画を見られる日を心待ちにしている。

5. おわりに ～教育はドラマだ～

教育はドラマだ。教室の中にドラマがあるとき子どもは生き生きと活動し、みんなの心が一つになっていくという事実を、ぼくは何度も目にしてきた。“ムッチャン”のドラマはその中でもかなり長編で山場の多いものだった。物語の始まりは、絵本の紹介というその時限りで終わるはずのものだった。それがひとりの児童の“心”によって続編が始まり、まわりの人たちのあたたかさによってずいぶんもりあげていただいた。大分市の側にも、あの千羽鶴によって式に向けての機運が盛り上がり、新聞紹介によって取り組みが県内外に広まったというそれなりの理由はあったそうだが、あのあたたかさは決して打算ではなかった。そういう大人の心が子どもを動かしてくれた。ドラマはシナリオ以上に発展し、子どもたちに多くのことを残してくれた。

“ムッチャン”のドラマが展開されているころ、教室の中にはいくつものドラマがあった。とりわけ、11月、球技大会とそれにむけての半月ほどの間に、実に感動的なドラマをくり広げていったのである。試行錯誤をくり返しながら、「勝てればがんばりあったことをよろこびあい、負ければがんばりあえたことをなこうじゃないか」と誓い合い、試合に臨むのである。(ドラマはしばしば「名言」を生むものだ。)子どもはこう書き切った。「球技大会は決してやくだたなかったとはいきれない。人に対しての心をまなべた。」と。“ムッチャン”は、こうした学級の空気を背景にしてはじめて可能であったし、“ムッチャン”はまたなかまをさらに高めてくれたのだった。

3学期半ばごろから、子どもたちは受験の渦の中に巻き込まれていった。受験する者にとっても、そうでない者にとっても、その空気はわずか12才の肩には重すぎる荷だった。ひとりひとりがバラバラにされ、なかま集団はくずれた。教室は暗かった。そこにはかつて“ムッチャン”に取り組んだような活力はなかった。

3月になり、卒業の日まであと2週間ほどになったころ、子どもたちはどん底からはいあがってくるのである。なかまの輝きをもう一度取り戻したいという強

い思いがみんなの中にあった。謝恩会の球技大会を舞台にドラマはクライマックスをむかえる。「人に見放されることよりも、人を見放すことの方がつらい」とある子は言った。「なかまがいてわたしがいた」とある子は言った。かつて経験したことの無いしんどさの中からはいあがってきた子どもたち。彼ら、彼女らの瞳のきれいだったこと。

教師は演出家だ。演出がうまくいったとき、子どもはすばらしいドラマを演じてくれる。ぼくのクラスの子どもたちは、感動的な「卒業」を演じてくれた。そこまで子どもを育ててくれたもの、それはムッチャンとそれを通して知り合った多くの人たちだと思う。“ムッチャン”は子らの心の中に平和の大切さとなかまを思う心を残してくれた。

4月、41人のぼくのなかまは中学生になった。

ヒロシマのこえが聞こえますか

これは、1985年度の6年生のクラスにおける実践記録です。集団作りのスタイル確立期の取り組みです。1986年4月の文章で、87年発行の『らんじょう』No.20所収。

1. ヒロシマへ

私は、命のある限り二つのことを一生懸命にします。一つは平和運動です。戦争に反対し、平和を守っていくことです。もう一つは解放運動です。差別をなくすことです。差別がどんどん強められていったときに戦争は起ります。ですから、この二つのことをやっていきます。しかし、次はみなさんの番です。みなさんがしっかり頑張る番です。

1985年11月1日、広島市の被爆教師下原隆資さんが、子どもたちを前に言われた最後の一節である。

A小学校が修学旅行で広島に行くようになって10年あまりになる。平和公園に立ち寄るだけであった状態から、6年間の平和、人権学習の集大成の場としての位置づけを持つに至ったのは、4年前からである。その前の年、ぼくにとっては初めての6年担任の年、単に広島へ行くだけでは学べないのだということを思い知らされてしまった。つまり碑や資料館の展示物は、貴重であるが所詮は“物”でしかない。旅行前の教室での取り組みが進めば進むほど、すき間風を感じてしまうのだ。最も象徴的であったのは、バスガイドの「不幸な過去がありました

が、今はこんなにりっぱな街になりました」という一言であった。おまけにこのガイドさん、広島駅に近づくと、西城秀樹の経営する喫茶店の位置まで教えてくれる親切ぶり。平和学習という雰囲気とは程遠いものであった。

その次の年から、自分の足で確かめ、自分の自分で見、自分の耳で聞く旅行づくりを目指してきた。それから4年目。

6月には学級に「つるの会」をつくり、千羽鶴を折りはじめた。2学期に入ると修学旅行実行委員会を組織し、旅行の日程を組んだり、学習の準備をすすめた。実行委員会では機関紙を発行し、学年や必要に応じて全校に配布した。

修学旅行は11月の1日、2日だった。広島駅から路面電車で平和公園へ向かい、原爆ドームや爆心地を見学したあと、原爆資料館と平和記念館を見る。そのあとはグループでのフィールドワーク（碑めぐり）である。それぞれが思い思いの碑を訪ね歩きながら、千羽鶴をささげた。ぼくの学級だけでも1万5千羽の鶴が折られた。そして旅館へ行って下原さんの被爆体験を聞き、再び夕暮れの平和公園に戻って慰霊祭を行う。ここで子どもは自らの決意を述べるのだ。こうして1日目が終わり、翌2日は、宮島へ渡ってみやげを買ったりして過ごした。

旅行後、実行委員会は戦争展に取り組んだ。それは、修学旅行のまとめの場でもあり、下学年の子らに平和の問題を考えてもらう場でもある。特に戦争を扱った絵本の読み聞かせには連日多くの低学年の子らが集まってきた。期間中、のべ1000人をこす盛況ぶりであった。

2. ビデオ「ヒロシマのこえがきこえますか」

ヒロシマで学んだことを子どもたちの心に残したい。そう思いながら20日あまりが過ぎていた。その間、旅行記を綴ったり、一番心に残っている場面をさし絵入りの詩の色紙に書いたりしたけど……。確かに修学旅行の思い出は子どもの心を離れないだろう。しかし“ヒロシマ”が、夜の枕投げと同列であっていいのだろうか。いや、“ヒロシマ”が思い出であっていいのだろうか。

“ヒロシマのこころ”をもっと子どもの側に引き寄せたい。それには修学旅行で出会った下原さんの被爆体験に触れ直すしかないと思っただけでなく、あれやこれやと思案するうちに、ビデオづくりを思いついた。そして次の瞬間ぼくはためらった。ビデオづくりがどれほどの時間を要するのかも、どれほど大変なことかも知っていたから。しかし、ぼくはこれにかけてみようと思った。

このクラスの子どもたちは、物を作ること、産みだすことには、いささか自信と誇りを持っていた。5年生の2学期のことである。学級でうさぎを飼いたいという話が出た。動物班はうさぎの飼い方をペットショップへ聞きに行ったりして計画をすすめた。インアリア班は廃材をもらってきて小屋をつくった。銀行班は

古新聞や古雑誌を集めて資金調達をした。植物班はかいわれ大根やほうん草を栽培して“市”を開き、資金集めに協力した。4か月ほどかかってやっと2ひきのうさぎが学級にやってきたのである。それから1年あまり、新しい生命の誕生と死を何度か経て、6ぴきのうさぎが卒業の日を迎えたのである。

5年生の3学期。連凧づくりにとりくんだときのことである。緊張した手つきで息をとめて、横骨にする竹ひごを曲げる。横骨と凧のシートをはり合せて、縦骨をつけ、尾をつける。それに糸をつけたのを順につないでいくのだ。最初は50枚であったのが、子どもたちの熱意で100枚になった。250メートルの糸につながれ100枚の連凧が冬空に舞いあがったときの感動。

みんなで力を合わせてひとつのものを産み出していったとき、学級集団が前進した。“うさぎ”は命の重さを教えてくれた。休みの日（特に夏休みなどの長期の休み）の世話は大変だった。その世話のあり様をめぐって激論が交わされたことも何度となくあった。そんな中でうさぎの妊娠を見分ける“うさぎ博士”が生まれ、日曜日にえさを持ってうさぎ小屋を訪れる心が育った。“連凧”は子どもたちに集団を意識させてくれた。ひとつひとつの凧は、よくあがるのもそうでないものもある。それが1本の糸につながれて舞いあがっていく姿は美しいものだ。以来、“れんだこなかま”というのがぼくたちのクラスのキャッチフレーズになった。子どもたちは、“うさぎ”や“連凧”が自分たちをひとつにしてくれたこと、前進させてくれたことを体験から知っている。だからこそ“自信”と“誇り”を持っているのだ。

さて、11月下旬のある日のこと。ぼくは、「修学旅行のビデオをつくってみやへんか。」と、子どもたちに語りかけてみた。こういう時の子どもたちの反応は実にはやい。衆議一決。内容は下原さんの被爆体験をまとめたものにすることに決まった。

続いての学級会で、ビデオのテーマを話し合った。一番心に残っていること、一番下原さんが伝えたかったと思うことを出し合った。以下、子どもから出されたものを挙げると

- 原爆にあったあと、母親は決して我が子を捨てなかった。たとえ黒こげになって死んでいても、その子を抱いて逃げたということ。（ヒロシマのころ、母の愛）
- 下原さんが友だちを捨てて逃げたということ。逃げる時、死体を足でけたこと。（原爆が人間の心をうばった。）
- 下原さんのお父さんが、下原さんを助け出し、長い距離を背負って歩いた。お父さんは戦争で足を悪くして家に帰っており、けがの直りかけに無理をしたため、一生足が不自由だったこと。（家族の愛）
- 原爆にあったあと 外に逃げた被差別部落の人は、冷たい仕打ちをうけ、強

い放射能の残る広島に戻り、数多く亡くなったこと。部落の人や朝鮮の人の死体が最後まで放っておかれたこと。(原爆の地獄の中でも、死体にさえ差別があった。)

次には、ビデオづくりの手順であるが、脚本は、子どもから出されたテーマを中心にぼくが書くことにした。話にそっていくつかの場面を絵に描く。それをビデオ撮りして編集したものに音声のアフレコするというようにした。

12月に入って絵を描く作業を始めた。子どもたちを3人ずつのグループに分け、そのグループで一番描きたい場面を選んだ。話に合わせて場面を構成するというのは難しく、しかも実際は目にすることのできない40年前の世界である。下絵を書くだけで相当の時間を要してしまった。おまけに学級で自由に使える時間は限られているし、やっと1枚目の絵がで采上がったころには、2学期も終わろうとしていた。

脚本を書くというぼくの仕事は、学期末の雑事に追われて一向に進まず、結局は、正月の宿題になってしまった。少々お屠蘇の入りすぎた頭を冷やしながら、やっと書き上げた脚本は、原稿用紙16枚分といういささか長いものになった。

3学期。厚みのある脚本のコピーを子どもたちに手渡し、いよいよ作業にも熱が入る。この当時のことを振り返ってある子がこう言っている。

「下原先生の話に基づいてビデオづくりをすると決まった時には、私たちなんかできるのかなあと心配でした。シナリオを渡してもらったときは、その心配がもっと大きくなりました。だけど、がんばろうという気持ちも大きくなりました。」

なかなかうまく描けなくて何度もやり直したり、新たな場面を描き足したりしているうちに、2月になっていた。描いた場面はテロップも含めて36になった。(実際の撮影ではその他に図表や写真を11枚使った。)

2月に入って間もなく、“声の出演”の配役と、係の仕事を決めた。全員が声の出演と裏方の仕事の両方に必ずかかわるようにした。

配役が決まると、さっそく読み合せである。助監督がストップウォッチ片手にタイムをはかっている。

そして、2月12日。いよいよビデオ撮りだ。みんなが2か月半近くもかかって描き上げた絵をビデオに収める。撮影係の子も、助監督の子らも、それを見守る子らも、1枚1枚の絵に視線が集まっている。どの絵もそれ自体がすぐれた作品なのだ。黒こげの死体を描きながら、炎の中を逃げまどう人を描きながら、40年前のうめきを、叫びを聞いたに違いない。

2月14日。録音。36人の子どもたちが入ったスタジオはシーンとしている。まずは練習。感じを出すのはなかなか難しい。ある子はこう言っている。「ビデオの中ではあまりうまくしゃべれませんでした。『あっ、B 29だ』というところでは、7、8回カットされ、誰かに交わってほしいと思いました。」「声の録音は、

間違わないか、とちらないかと、本番前何度も読み直したりしました。もう心臓がドクンドクン激しくなって、声はふるえそうになるので、すごくあせりました。」そして、本番。録画係の子がカセットデッキのキーに指をかける。助監督の右手の指がストップウォッチのボタンに触れ、上に上げていた左手が下りようとしている。マイクの前に立った出演者もスタッフも緊張の一瞬である。こうして、2時間あまりで録音は終わった。

効果音は、カット毎に音楽を選んで入れる予定であったが、準備が間に合わず、結局全編にストラヴィンスキーの「春の祭典」を使うことにした。これについては、僕の独断だとあとで音楽係の子らにしかられることになるのだけど。

最後に残されたのが編集の仕事。つまり、ビデオ撮りした絵と、せりふを入れた録音テープと、効果音楽を、別のビデオテープにまとめてつなげていくのだ。ぼく自身が機械については全くの素人だし、一諸にやるのが子どもだし、これは正直不安だった。学級全体でやれる仕事でもないので希望者に残ってもらうことにした。予想外にと言うか、男女を問わず多くの子が残りがった。夜も遅くなるだろうということで、男子5人が残った。2月21日のことである。実際にやってみると大変な作業だった。録音の言の大きさが一定でないのでビデオに編集していくと聞き取れない部分があってやり直したり、1か所せりふをとばしていたことに気付いてやり直したり……。それでなくても、それぞれの機械の作動する時間のズレを計算しながら同時に4台の機械を動かすのだから、子どももぼくも緊張の連続であった。途中でクラスの女の子が、それまで決して仲が良かったわけでもないのに、おやつ差し入れを持って来てくれたのがうれしかった。そのおやつで空腹をしのぎながら、やっと完成したのは8時半を過ぎたころである。「夜おそくまで残ったときはとても緊張しました。8時半ぐらいにビデオが出来上がった時はとてもうれしかったです。」(子どもの感想から)完成のあとみんなで食べに行った屋台のラーメンのおいしかったこと。

完成してみると作品の長さは23.5分であった。2月25日、作品のあとに子どもたちの声を添えた。合計36分。

2月28日は最後の授業参観の日であった。その日、子どもたちは画面に食い入るようにして自分たちの作ったビデオを見た。数多く来て下さったお母さんたちもまた……。

以下、子どもの感想をいくつか紹介しておきたいと思う

「自分達で作った。だからこそしんげんに考えながら見たんだと思う。その結果、戦争がどんなにおそろしいものかわかったような気がします。」

「下原さんが私たちに言いたかったことが、ビデオをつくったことによって分かったような気がする。」

「原爆にあって逃げる人の絵をかきました。かきながら本当にあんなのだったの

かと思うととてもこわいです。」

「お父さんは『死ぬまで足が不自由』だってテレビから声が聞こえてくると、とっても悲しかったです。悲しいどころか、原爆に対していかりがこみあがってきました。」

「ビデオを作っていて、前、修学旅行で聞いたとき覚えてなかったことや、言っていた時の下原先生の気持ちももう一度考えなおせたと思います。」

「自分たちの作ったビデオを見ていると、本当に原爆はこわいと思ひと思ひました。人を殺してしまったり、傷つけたり、心をぼろぼろにしたりすることが、下原先生の体験からわかりました。だから私も原爆は絶対いやです。」

「みんなががんばってつくったこのビデオは、下原さんが最後に言った言葉と一緒に大切にしたいと思います。」

「私はお母さんがぐったりたおれているところに赤ちゃんが泣いている所の絵をかいた。自分は背中が黒こげになってとてもいたいの、赤ちゃんのためにあおむけになって寝ている……。自分はどうなっても子どもを助けたいという親の気持ちがよくわかった。」

「ビデオを作っている時、修学旅行では教えてもらえなかったことを教えてもらったと思います。そして絵を書いている時は、本当に 40 年前にこんなことがあったとは信じられません。だから私はもうあんな絵は書きたくないし、あんな絵のもとになるようなことはいつの時代になってもあってほしくないと思いました。」

「私はこのビデオづくりをして本当によかったなあと思いました。はじめ、むずかしそうだなあと思ってうまくいくかなあと思って心配だったけど、わりとうまくできてうれしかったです。……原爆は人間を人間でなくしてしまうおそろしいものだということがわかりました。……私は絶対にあんなめにあうのはいやです。だから戦争は2度と起こってはしくありません。そして原爆も2度とどこにも落としてはいけないと思いました。世界の大きい国々は核実験とか言って島や砂漠に落としているけど、それもやめてほしいなあと思います。」

「みんなで楽しくやれたことがうれしくてたまりませんでした。」

ぼく自身、このビデオづくりをやってよかったと思う。ぼくの思いのかなりの部分は達成できたと思う。それ以上にうれしかったのは、なかまをつないでくれたことだ。2年間とりわけ6年生の1年間、女子の間がうまくいっていなかった。そんな中で3学期に入試があり、中学進学を迎えるのである。そうした状況下でのビデオづくりの日々。完成が近づくにつれてみんなで1つの目標に向かうことができた。それがうれしかった。

タイトルに触れておきたい。ビデオのタイトル「ヒロシマのこえがきこえますか」は、第一義的にはビデオを見る人への投げかけである。しかし、本当はそれ

以上にビデオづくりに取り組んでいる子ら自身への問いかけなのだ。

3. ヒロシマを生きる

何か違うような気がするのだ。確かにビデオづくりはよかった。だけど、ぼくの思いとは微妙に違うのだ。“ヒロシマのこころ”を子どもの側に引き寄せるとするのは、もっと子どもの生活に根ざしたものであるべきだと思う。自らの生き方に返ってくるものでなきゃならないはずだ。そんな思いから、ぼくは小学校での最後の授業に、「ばんざいじっさま」（さねとうあきら作）という物語教材を選んだ。話はこうだ。1945年6月のこと。日露戦争の勇士だったという万造じっさまのもとに、縁起をかついで村人たちは出征の「ばんざい」をたのみに来ていた。そんなある晩のこと、鉾山から中国人が逃げ出した。（これは強制連行されてきた中国人が虐殺された史実“花岡事件”をモデルにしたものである。）村では山狩りが行われた。じっさまは自分のじゃがいも畑で一中国人と出会う。一つきにしようとした竹やりの向こうで無心にいもを食べる姿を目にする。自分の目の前にいるのは、“にくい敵”でも“アカ”でもなく、百姓であることを知り、逃がしてやる。そのため、じっさまは、憲兵にとらえられ、非国民の烙印を押される。村人はそれ以来じっさまのところには寄りつかなくなる。じっさまは拷問で傷ついた体で、それでも“宮城”の方を向いてばんざいをしたまま死んでいくのである。3月8日に授業を始めて10日間、卒業製作の仕上げや卒業式の練習などに追い回されながらも10時間を確保、17日に無事終わることができた。授業では「一読総合法」と言って、その日の授業の部分だけをプリントし、その時間に手渡し、読んでいく方法をとった。子どもたちはハッピーエンドを期待しながら話の続きを予想し、そのたびに裏切られていった。これでもか、これでもかとはたたみかけてくる重苦しい空気。その中で、常に強い者の顔色だけをうかがいながら生きていく村人。この村人の姿にこそ、己を映してほしいのだと思った。

授業と並行して、卒業前の10日間、ぼくは『日刊6の1』という通信を発行した。一通り物語が終わった後の『日刊6の1』である。

物語の中での村人の婆を思い返して下さい。多くの方は、あの村人に対して、「冷たい」「自分勝手だ」と言いました。心の中では戦争なんかいやだと思っていたであろうに、口に出して言えない姿、じっさまを見捨てていく姿は、たしかにはがゆくもありました。そういう村人たちの「勇気のなさ」に支えられて、あのまちがった戦争は支えられていたのです。でも本当にみなさんはあの村人を笑えますか。

この前の時間に書いた〇君の感想文を紹介します。

「ぼくは、村人だと自分で思います。なぜだと言うと、人がいじめられてい

るのに何も言わず、知らんふりをしていった。いろいろな問題に見向きもせず、何も言わず、ただいじめられている子がかawaiiそうだなあと思い見てきました。たとえばAさんのことです。Aさんがいじめられているのに、ぼくはとめずにいっしょにいじめていました。とめるとみんなひやかされるか、けいべつ目で見られるからです。いずれもぼくにとっていやなことです。でもそれは、ぼくのいいのがれなのです。そういうふうにされてきたAさんのことを、ぼくは考えたことがないからです。」

O君のすばらしさにまず拍手をおくります。O君の心を目覚めさせてくれたのは、じっさまのやさしさだったのでしょうか。中村君（2月7日、3月1日付の朝日新聞の手紙欄に投稿した高校生）の勇気だったのでしょうか。O君の言葉をかりれば「(いじめを) とめるとみんなにひやかされるか、けいべつ目で見られる」から、「ぼくはいっしょにいじめて」いたというのです。これこそが、あの時代の《非国民》の思想であり、戦争を支えた民衆の心ではありませんか。この見事に「いじめ」を支えていく思想と行動こそが、いざとなれば戦争を支えていくのです。

下原さんの言葉を思い起こして下さい。差別がどんどんと強められていった時に戦争が起こるのだと言われましたね。そのあと、それじゃ今のみんなには何ができるのかという話の時にこう言われたと思います。クラスの中にある「いじめ」をゆるさないことだ。一生懸命なかまづくりをすることだ。戦争と「いじめ」とどんな関係があるかということを上例が示しています。さねとうさんは、そのことを「どういう形であれ、《弱い者いじめ》がはじまったら、りっぱな《戦争》です」という言葉で表現しています。

戦争についてどう思うかと聞かれたら、みんな反対だと答えます。そして、あの当時の村人の姿を非難します。しかし、非難している自分自身の中に、村人と同じ心と行動があることに気付いていないのじゃありませんか。O君はそのことに気付いたのです。本当に戦争に反対できる人間への第一歩は、ここから始まるのだと思います。再び、問いたいと思います。あなたは村人ではないのか、と……。

子どもは応えてくれた。卒業2日間の『日刊6の1』である。

最後の最後の授業を終えて、少しばかり思うことを書いておきたいと思います。

O君の文章は、「ばんざいじっさま」の話をも自分の方へ引き寄せてくれました。多くの人が、自分は村人だと書きました。(それらにまじって「自分は中国人だ」と書いた人がいたという事実を重く受け取ってほしいと思います。) その中に、ぼくの心をはなれないものがいくつかありました。3つ紹介します。

○私がばんざいじっさまの中に出てくるとすれば、村人です。理由は、私もいじめられている人を見ても、知らないふりをするからです。そこでは、やっぱり知らないふりをした方がとくだからです。かまったりすれば、まわりからいろいろ言われたりして、私にはそんだけ、知らんふりすれば、それはそれで終わってしまうからです。……ただそこから逃げるのが精一杯なのです。そして、そんな行動をした後には、こうかいをします。いつも。

○私はきっと村人です。なぜなら○君と同じことをしたことが何どもあるからです。友だちがいじめられているのに注意することも助けることもできないし、くやしかったです。もし自分が注意すればまたきっといじめられると思ったからです。私もあの村人をせめました。悪い人たちだと思いました。でも、今よく考えてみると、村人もつらく、悲しかったんだろうと思います。きっと村人は自分を守るのに一生懸命だったろうと思います。

○私も村人でした。今もそうだと思います。時々思うけど、いじめている人は、したがえている友だちはいやいやしてるってこと知っているような気がします。そして、きつくしかってくれる（自分のためを思い）友だちを心のどこかでさびしく待っていると思います。心と体をうまくあつかえない人もいるんじゃないかって思います。

ぼくは、あまりにも深いところであえぎ、苦しんでいるなかまの姿に、心が痛いです。授業が、それ以上に、6の1という集団がこれで終わるかと思うと残念です。今はこう言うしかありません。それでも、苦しみながら、後悔しながら、村人たちは結果的に戦争に協力したのだと。さねとうさんのいう「勇気」がほしいです。何としても「勇気」を持ちたいです。「差別」（いじめは差別だ）にも「戦争」にも手をかしたくありませんから。

子どもたちは今やっとスタート線に立ったところかもしれません。卒業の前日、ぼくは子どもたちにこう語った。

“おい、みんな、今年こそ心の中に連凧をあげようじゃないか” —これが、6年生をむかえた最初の日のぼくのみんなへの呼びかけでした。1年間が終ろうとしています。どうだったでしょうか。

クラスの中に“なかよし”はできた。しかし、“なかま”にはついになれなかったというのがぼくの印象です。このことについては、担任として大きな力を発揮できなかったぼくの責任が大きいと思います。みなさんに心からおわびします。そんな中で何とかしようとして心を痛めてくれた何人かの人たちに、感謝します。自分の責任を抜きにして、こういう言い方をするのは身勝手だと言われそうですが、悩んだ分だけ、心を痛めた分だけ、心が成長したのだと信じています。

14 日の6年生を送る会のカラオケで「なごり雪」を歌いましたね。あれ最初は3人で歌うはずだったんですよ。それがわずか1日の間に男子をもまきこんで、ついには学級全員で歌うことになったのです。クラスが動いています。確かに動いています。さらに、本番の方の「ありがとう、さようなら」を歌うときには、「大きな声で歌、うたおな」と声をまわしていったというじゃありませんか。これだよ、なかまって。小さいながらも春風の中を連凧があがってるね。あと1年あったらなあ…なんて思っちゃうよ。

3月20日、子どもたちはとびきり上等な卒業式を演じてくれた。春休み、ぼくは2日ばかりで我が家の軒先にうさぎの家をつくり、6ぴきのうさぎの定住の地とした。さらに18本ものビデオ（これは「ヒロシマのこえがきこえますか」に、卒業式やスピーチを加えた1時間33分のビデオ）のダビングを申しつけられ、忙しい休みになった。これを見ながらヒロシマを思い、なかまを思ってくれるならと、思う。

休み中、子どもたちは、自分たちが巣立っていった教室を訪れ、黒板一面に“落書き”をしていった。その中のひとつ。「教だんに立っている先生の姿を、もう制服姿で見られないのかと思うとさびしいです。」人を泣かせやがって……。